

カプセルベッドで創る

病院環境の新提案

地方独立行政法人佐世保市総合医療センター
(長崎県佐世保市)

仮眠室でもプライベート確保 職員定着に好影響もたらす

佐世保市総合医療センターは、地方独立行政法人に移行した2016年から、看護師増員を図ってきた。認定・特定看護師取得に向けた奨学金貸付制度の導入、2交代制の実施に向けて、23年には、コトブキシーティング株式会社のカプセルベッドを活用した仮眠室を整備。働き続けられる環境づくりに取り組んでいる。

学べる環境づくりや
自己実現支援に注力する組織

佐世保市総合医療センターは明治の開設以降、長年にわたり市立佐世保市民病院として地域住民を支えてきた。2016年に地方独立行政法人に移行したのを機に、佐世保市総合医療センターへ改称。現在は、三次救急病院、地域がん診療連携拠点病院、地域医療支援病院の機能を持ち、長崎県北地域の基幹的な医療機関の役割を担っている。

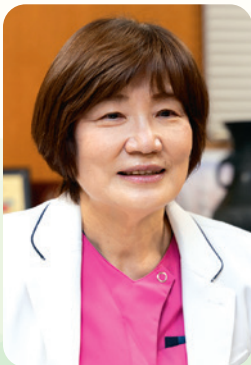
緒方信子副院長兼看護部長は、地方独立行政法人移行時から、看護職員の増員を図ってきた。「先進的な医療を担うには、看護師の増員は欠かせません。就職者増、離職者減の両面で工夫し、毎年10人増を目標にしてきました」と振り返る。

看護学生の受け入れ時は、「学生さん」ではなく名前で呼ぶことなどを職員に徹底。新入職員に対しては、入職1カ月後などの定期面談だけでなく、病棟師長を中心

に、きめ細やかにフォロー面談を行う。先輩職員は教育法の変化や若年者の特性などを共有し、みんなで育てる風土を醸成している。

入職後の目標管理は、年1回の自己申告をもとに行う。学びたいことや適性の自己分析などに配慮し、本人の自己実現支援のための部署配置を検討。専門性を高める研修派遣や認定看護師資格取得の支援も充実している。認定看護師資格取得に向け、23年度から奨学金貸付制度を開始。年間総額300万円を上限として2年限度で貸し付け、資格取得後10年間で返済は免除される。資格取得中は職務免除で給与は全額支給する。

「就職説明会で聞かれるのは、学べる環境や支援の有無がほとんどです。当院は救急、がん診療、母



緒方信子副院長兼看護部長



仮眠室は落ちついた雰囲気を演出



カプセルベッド内部でも快適さを追求

子周産期などの特色があり、その分野の認定資格を持つ看護師が複数名在籍しています。勉強しようという風土や目標とする看護師像を身近に感じられることもあり、当院での勤務を望む看護職員は増加しています」

仮眠室は職員だけでなく就職希望者にも好評

若い世代は休みを取得しやすい病院への就職を望むことから、緒方副院長は2交代制の導入が必須で、そのためには人材の確保に加え、休憩室の整備が欠かせないと考えてきた。コロナ禍をきっかけに、「疲弊する看護師が院内で休

める場所を早急につくりたい」との思いが募り、カプセルベッドの導入を決めた。

院長をはじめ他部門の理解と快諾があり、財務課執務室だった部屋を男女別の仮眠室へ改修。入口にある休憩室にはメルヘン調の壁紙を用い、緊張感が和らぐよう工夫。フリーWi-Fiも完備した。奥は仮眠室で、1日約80人の夜勤者に対応できるよう、各病棟に2つつつカプセルベッドを割り当てた。ベッドは周囲から完全に仕切られた個室で、それぞれに照明、時計、USBジャックを設置している。また、疲れを癒す場であり、快適なくつろぎの時間を過ごす

ベッドであるため、清潔かつ感染対策に考慮した。導入当初は、「病棟から離れているため、何かあった時、すぐに戻れない」

と仮眠室の利用を渋る職員もいたという。

緒方副院長は「以前はナースステーションの一角にイスを並べて横になるだけだったので、身体のアチこちが痛く、ゆっくり仮眠できませんでした。こんな働き方ではないけない。メリハリをつけるためにも休憩室、仮眠室を使うよう促しました」と語る。

仮眠室を利用することで、気分のリセットになると気付いた職員が、互いに声を掛け合うことで、利用者は増えていった。不安に思う人は、仮眠ではなく、単に休憩の場として利用し、気分転換を図っている。

カプセルベッドについての職員の声

- 病棟より静かな環境で休憩できる
- ソファに比べ、仮眠後の腰痛が軽減された
- ナースコールや足音のない環境で休憩できる
- 精神的に楽になった
- 足を伸ばせるのがよい
- 緊張がほぐれる

地方独立行政法人 佐世保市総合医療センター

所在地：長崎県佐世保市平瀬町9-3
TEL：0956-24-1515
病床数：563床

コトブキシーティング株式会社

所在地：東京都千代田区神田
駿河台1丁目2-1
URL：<https://www.kotobuki-seating.co.jp/>

仮眠室は、看護部職員であれば24時間利用でき、2ベッドの運用は各病棟に任されている。遠方から通う職員は、夜勤終了後の休憩として仮眠室を利用。家で子どもの世話をしっかりとするため、仮眠後に帰宅するという子育て中の職員もいる。台風などの災害発生時には、1ベッドを夜勤者が、もう1ベッドを帰宅困難者が使用することも可能だ。

緒方副院長は「就職希望などの見学者は、休憩室・仮眠室を見て、『看護師を大事にしていることが伝わる』と評価してくれます。これからも、職員の声を吸い上げ、職場環境の改善をフレキシブルに考えていきたい」と話す。